

## 原文

大院君が事件の首謀者であるかのように誤解するおそれのある表現である。

大打撃をうけた朝鮮国内では、反日の気運が日増しに大きくなっていった。  
1882（明治15）年、国王高宗（1863～1907）の父大院君（1820～1898）（李熙（1851～1934））は軍隊の一部を動かして日本公使館を包囲し、王妃の閔妃（1851～1915）一族による政権をしりぞけようとして失敗した（壬午軍乱）④。日清両国とも軍隊を派遣したが、清が大院君を天津に拘留して閔妃政権への支援を行なったため、日清間に軍事対立が生まれた。  
さらに、

## 修正文

大打撃をうけた朝鮮国内では、反日の気運が高まった。1882（明治15）年、王妃閔妃（1851～1915）らによる軍制改革に不満をいだく旧軍と市民は、閔妃派の主要人物を襲撃・殺害し、日本公使館を焼き打ちした（壬午軍乱）④。軍民に推されてふたたび政権の座についた大院君（1820～1898）は、事態を收拾、腐敗を一掃し、軍事力を背景に賠償金などを要求する日本をしりぞけるなどした。しかし、清は大軍を送って、反乱の首謀者らを逮捕・処刑し、大院君を天津につれさり、閔妃政権を復活させてかいらい政権とした。そのため、日清間にあらたな対立が生まれた。その後、